

化し、瓦器の出現をみせる第IV期となる。こうした形態変化を今後の発掘資料の増加を待って、細部の特徴および調整法と兼ね合わして再度検討したい。

(参考文献)

- 1 『宇陀・丹切古墳群』 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第30冊 奈良県教育委員会 1975
- 2 『奈良市埋蔵文化財調査報告書』 奈良市教育委員会 1983
- 3 同 上
- 4 同 上
- 5 報告書未刊行のため、図は川越俊一氏の『大和地方の瓦器をめぐる二、三の問題』から転用した。
- 6 『纏向』 桜井市教育委員会 1976
- 7 注2と同文献
- 8 『法隆寺発掘調査概報I』 法隆寺 1982
- 9・10・11・12 異 淳一郎「古代窯業生産の展開—西日本を中心にして—」(『文化財論叢 奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集』) 奈良国立文化財研究所 1983

## 第2節 木製匙について (図35)

井戸跡4より出土した木製匙は、木理を巧みに生かして製作されたもので、これまでに出土している木製品とは大いに趣を異にしている。日本在来の食事具の中では、匙形は主流とならなかったようで、考古遺物としての類例に乏しい。

比較検討の資料としては、むしろ正倉院に所蔵されている金属製匙や韓国慶州市雁鴨池出土の青銅匙などと比較して、系譜関係を推定することが必要であろう。  
(文献2)

まず、井戸跡4の匙の要点だけを示すと、匙面長8.5cm、幅3.9cm、柄長22cmである。匙面は楕円の木葉形を呈し、柄部は頭部で少し広がる。また、柄部中央部を山形に稜線をつくり、先端は八字形を呈している。側面観は、匙面と柄部が135°の角度をつけて、柄部が直線的にのび上がっている。

正倉院南倉に所蔵されている金銀匙(南倉43)と、佐波理匙(南倉44)についてみる。金銀匙は、銀造鍍金で、匙面が木葉形をしている。総長29.7cm、匙面長7.8cm、柄長22.2cmあり、匙面には金敷の上で細かく鎚打した跡があることを報告している。佐波理匙は、匙面長8.2cm、幅4.95cm、柄長16.5cm、幅1.9cmである。その特徴は「匙面は木葉形で、上面中央に葉脈を線刻している。柄は幅がやや広く、柄と匙面の角度は

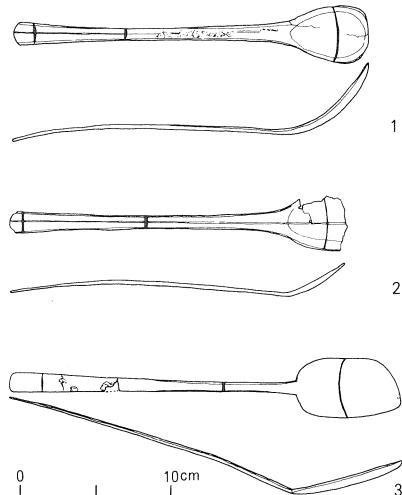


図35 韓国統一新羅時代の匙  
1.平山山城里 2.扶余扶蘇山 3.陰城美谷里

120度もあり急である。柄先から匙面に向かって葉脈のように2本の線を刻し、柄の両側にも一線をくまどりのように刻す」とあり、明らかに木葉形を模倣したようなつくりである。正倉院所蔵の匙は、同所蔵の「貢新羅物解」の中に、白銅匙という品目が上がっていて、新羅製品であることが指摘されている。

(文献3)

次に朝鮮半島出土の匙製品は、どのようなものがあるかみてみたい。韓国出土の匙は李蘭暎氏の  
(文献4)  
「韓國匙箸の型式分類」という優れた論文があり、三国時代から、統一新羅時代、高麗時代、朝鮮時代と4期に区分して、匙の型式分類を試みられた。ただ、資料的な制約から三国時代の出土遺物は乏しく、統一新羅時代になって金属製の匙の隆盛をみるようである。

三国時代の匙は、4例報告されている。最も古いものは初期金属文化期の匙で、これ以降では6世紀初頭の慶州金冠塚出土の小形匙がある。いずれも匙面は、円形を呈している。また、感恩寺跡西塔より出土した匙は、竹の節がついたような柄で、中間部と上面に葉脈模様の装飾が施されている。

統一新羅時代の匙は、6例報告されている。この時期になると匙面が橢円形を呈するものが確実に現われる。黄海道平山郡平山面山城里出土の橢円形匙は、全長26cm、匙面長7.1cm、忠清南道扶余郡扶余扶蘇山出土の橢円形匙は3点あり、長さは24.5cm、柄長は18~19cm、匙面長は7.5cm、幅3.5cm程度である。

慶尚北道永州郡北安面龍溪里からは橢円形匙が2点出土している。長さは24.2cmである。これらの匙面は木葉形を呈して、柄部の縁辺に一条、中央部には二条の線刻が施されている。先端部は、八字形のいわゆる扇形をしている。側面観は、匙面と柄部とは130°程度の角度をもち、直線気味である。統一新羅末期に比定された忠清北道陰城郡大所面美谷里出土の匙は、これまでの資料と比較して柄部の取付け部が細くなり、先端部は四角形を呈している。また線刻も省略されるが、側面観は匙面との取り付け角度が急で柄部も直線に延びている。

高麗時代の匙は、匙の柄先端部が、いわゆる燕尾形と称される先端が2分割され、装飾が加わる。側面観は、柄部も屈曲するようになり、全体にS字形のような曲線を呈する。一方、柄先端が燕尾形をとらず、角頭形のままで推移する型式(長陵型式)のあるものが存在することも指摘された。

長陵型式のものは、仁宗長陵出土銀製匙、長さ32.5cm、匙面長8cm、幅3.7cm、京畿道坡州郡州内面出土銀製匙、長さ31cm、匙面長8cm、幅3.8cmなどがあり、これらの側面観はS字状の弧線を描くように、洗練されたつくりである。

高麗型式の匙は、京畿道華城郡東難面親里出土の青銅製匙、長さ22cm、匙面長7cm、幅3.2cmは、柄部の先端が魚尾形に2分割されており、燕尾形の初期的なものと考えられる。伴出遺物として墓誌が出土し、大定12年(1172年)の紀年銘をもっている。これ以降、高麗末期の12世紀中頃(1454年)の温寧君墓出土の燕尾形を最後に衰退する。朝鮮型式の匙については省略する。

以上のように韓国出土の匙は、柄先端部、柄の幅や側面観に著しい変化のあることが上記の論文

より明らかである。その上、李蘭嘆氏の指摘によれば、正倉院所蔵の匙は、統一新羅時代のものに各部位が類似していることを示されたのである。また、井戸跡4出土の木製匙については、忠清南道扶余郡扶余扶蘇山出土匙、あるいは、忠清北道陰城郡大所面美谷里出土匙などに類似している。ただ、後者の場合は柄先端部が角頭形であること、中央より匙面にかけて柄が細くなることなどに違いがあり、やや新しい要素かと思われる。そして、当遺跡出土の木製匙は、8世紀の新羅より舶載された金属製匙を忠実に模倣した可能性が指摘できよう。

(参考文献)

- 1 『正倉院の金工』 正倉院事務所編 日本経済新聞社 1976
- 2 『雁鴨池発掘調査報告書』 大韓民国文化公報部文化財管理局 1978
- 3 東野治之 「鳥毛立女屏風下貼文書の研究 一貿新羅物解の基礎的考察ー」(『史林』第57巻6号) 1974  
西谷 正 「正倉院の新羅文物」(『地域史と歴史教育』)木村博一先生退官記念会 1985
- 4 李蘭嘆 「韓国匙箸の型式分類」(『歴史学報』第67輯) 1975